The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動機づけ研究の過去，現在，そして未来に向かって ：研究の動向と研究方法論の視座から
Author(s)	西田，理恵子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85020
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

動機づけ研究の過去，現在，そして未来に向かって：

研究の動向と研究方法論の視座から

西田　理恵子

1. はじめに

本稿では、1959 年から開始した動機づけ研究の過去、現在、そして今後の発展的研究について研究の動向と研究方法論の視座から総括することを目的としている。1959 年代から開始した動機づけ研究は半世紀以上の研究の蓄積があり、社会心理学期 (1959 年以降)、認知・状況期（1990 年以降）は、量的研究が主流であった（八島, 2019, p.100）。しかし、ウシオダの Person-in-Context Relational Model (環境の中の人：ウシオダの動機付けを関係性から捉える視点)に関する研究や (Ushioda, 2009)、複雑系理論 (Complex Dynamic Systems)が動機づけ研究で注目を集めるようになり（Larsen-Freeman & Cameron, 2008）、質的研究方法や混合研究方法にもより着眼がなされるようになりつつある（Hiver & Al-Hoorie, 2020）。より個人の動機づけの変化について非線形モデルを使用し精緻見ようとする質的研究、また、量的・質的研究方法を取り入れた混合計画法にも注目が置かれるようになったと言えるであろう。本稿ではまず、国内外での動機づけ研究に関するこれまでの研究の傾向と研究方法論を Boo, Dörnyei, & Ryan (2015) を参考に概観し、次に、国内の動機づけ研究の動向を取りまとめている Aoyama (2017)を中心に国内の動機づけ研究を総括する。また、Hiver & Al-Hoorie (2020)が刊行した"Research Methods for Complexity Theory in Applied Linguistics"を中心に、複雑系理論で使用されている量的研究・質的研究・混合計画法について総括を行い、ウシオダの Person-in-Context Relational Model (環境の中の人：ウシオダの動機付けを関係性から捉える視点)に関する研究を概観し、今後の動機づけ分野における発展的研究の可能性について論じる。

2. 先行研究

2.1 世界各国での動機づけ研究の動向

Boo, Dörneyi, & Ryan (2015)では、2005 年～2014 年にかけての動機づけ研究に関して世界各国で出版をされている 416 編の論文を対象にレビューを行った。本研究では、動機づけ研究に関わる書籍・文献を分析対象としている。動機づけ研究の初期段階（1959 年～）から 1990 年代にかけて、社会心理学的アプローチを中心とした研究が行われた。1990 年代からの認知・状況期では、教育心理学の理論的背景を基盤とした研究が行われ、2005 年代以降からは、コンテキストやダイナミクスの視点を取り入れた研究が行われている。これらの研究史の中では、2005 年以降の研究では、どのような理論と様々なアプローチが相互作用し

ているのかを把握するために、1) 社会心理学的時期においては統合的志向性・道具的志向性に関する研究が行われ、2) 1990 年代には、教育心理学である自己決定理論・帰属理論・自己効力感理論を応用した研究が行われているのか、3) 次いで、L2 自己に関わる研究が行われるようになり、4) 研究のパラダイムがどのように研究実践の中で広く行われているかについて総括している。この研究では、2005 年以降の研究に着眼された理由として、2005 年以降に「the L2 Motivational Self System (L2MSS)」[1]が提案されたことにより、動機づけ研究分野において研究の発展と進化が見られるようになった。更に、動機づけの研究分野において複雑系理論 (Complex Dynamic Systems Approach: CDSA)[2]が応用されるようになった。416 編の論文をカテゴリー化するために、1) 論文の種別(ジャーナル・チャプター)、2)「動機」(motivation)か「動機づけ」(motivating)かについて分類が行われ、3) 理論的パラダイムの分類、4) 調査対象者の分類、5) 目標言語 (target language) の分類、6) 研究方法論の分類が行われている。分析の結果として、世界的レベルで見る動機づけ研究は、2005/2006 年と 2013/2014 年を比較すると論文出版数が顕著に上昇し、その中でも特に英語学習動機づけの研究論文がその他の言語学習動機づけよりも上昇傾向にあると報告している。2005/2006 年度には 33 編の出版論文数に対して、2013/2014 年度には 138 編の出版論文数と、出版数については右肩上がりの上昇を示している。動機づけ研究と同様に適性についても調査を行っているが、適性に関する論文は、2005/2006 から 2013/2014 にかけてほぼ横ばいの結果であることが明らかになった。調査対象者の傾向は、小学生 (5.67%)、中高学生 (20%)、大学生 (51.64%)、その他 (22.69%)であった。研究方法については、335 編の論文中、178 編の論文は量的研究法を使用し、71 編は質的研究方法を使用している。73 編の論文は混合計画法を使用し、13 編の論文はその他の研究方法で論文を執筆している。量的研究の中では、多変量分析の中でも、*t* 検定・相関分析・分散分析 (ANOVA)を使用する論文が多く、共分散構造分析（SEM）も多く使用されている。質的研究では面接法を使用して、個人やフォーカスグループに焦点をあてて研究が行われ、その他に観察法や談話分析を行っている研究も見られる。実証研究をみると、2005/2006 の論文 23 編では、多変量分析 (一般統計) (15 編)、共分散構造分析 (2 編)、その他の質的研究 (1 編)、混合計画法 (4 編)であり、2013/2014 の論文では、多変量分析（一般統計）(40 編)、共分散構造分析 (5 編)、面接法 (14 編)、質的研究方法 (7 編)、混合計画法 (23 編)、その他の手法を用いた研究が 12 編であった。2009/2010 年以降には面接法を取り入れた質的研究が多く取り入れられるようになり、近年になると混合計画法も増えつつあると報告している。また理論的背景には、2010 年度以降には「L2 動機づけ自己システム論」の出版数が多く、複数の理論を組み合わせた研究も行われ「統合的志向性／道具的志向性と L2 動機づけ自己システム論」や「L2 動機づけと複雑系理論」の研究が見られている。さらに、動機づけ研究は様々な国で行われ、53 か国を対象に国別比較をすると日本 (11.34%)、米国 (8.96%)、中国 (7.46%)であると示されている。アジア圏での研究も多くみられるが、その中でも特に動機づけ研究は日本で数多く行われ (38 編)、中国 (25 編)、香港 (15 編)、台湾 (11 編)であり、アジア圏と比較しても日本における動機づ

け研究の多さを示している。これは、海外の動機づけ研究者が言語教員でないことに対し、国内の動機づけ研究者の多くは言語教員 (英語教員) であるため、目の前にいる学習者を調査対象者にし、動機づけとその他の要因間の比較検討、また「英語学習者」をどのように「動機づけるか」に焦点を置き、より教育現場に根差した研究が行われている傾向にあろう。

Boo, Dörnyei, & Ryan (2015)を総括すると、現在の研究の動向としては、理論的基盤は「L2動機づけ自己システム論」「統合的志向性／道具的志向性と L2 動機づけ自己システム論」「L2 動機づけと複雑系理論」が理論のトレンドであり、研究方法については、2000 年代初期では量的研究である多変量分析や共分散構造分析が主流であったが、現在では、質的研究や混合計画法を使用して動機づけを捉えようとする研究が増えていると言えよう。

2.2 国内の動機づけ研究の動向

次に、国内の動機づけ研究の動向と使用されている研究方法論について Aoyama (2017)が分析を行っているため、本論で総括する。Aoyama (2017)では、247 編の国内での動機づけ研究に関わる分析を行った。Boo *et al.* (2015) による研究では、日本を対象とした研究は 38 編しか行われていなかったが、Aoyama (2017) の研究では国内で出版された 247 編の論文が分析の対象となった。本研究の対象となった論文は、2005 年度～2017 年度にかけての論文であり、研究の方法として使用された分類では、執筆言語、出版年度、論文の種別 (実証研究・理論研究)、論文の焦点(動機・動機づけ・学習意欲減退)、調査対象者の年齢差 (小学生・中学生・高校生・大学生)、理論的背景 (社会心理学・L2MSS・自己効力感理論・自己決定理論・帰属理論・コミュニケーションへの積極性・複雑系理論・国際的志向性等)、方法論 (量的研究・質的研究・混合計画法)、データ収集法 (質問紙・面接法・観察法)、データ収集回数 (1 回・2 回・3 回以上)、量的分析 (クラスター分析・ *t* 検定／分散分析・相関分析・回帰分析・探索的因子分析・共分散構造分析・記述統計) に関してコード化を行い、精緻に分析をしている。2005 年から 2017 年にかけての出版数は増加傾向にあり、英語での執筆は、68.83%、日本語での執筆は、31.17%であった。年齢層については、小学校 (9.42%) 中学生 (4.04%) 高校生(8.07%) 大学生(73.54%) その他(0.45%) 様々な年齢層の混合 (4.93%)であった。国内での理論的背景として最も多く使用されている理論は、自己決定理論（24.38%)、複数の理論の組み合わせ(22.73%)、L2MSS(12.40%)、その他(12.4%)、社会心理学的アプローチの研究 (4.13%)であり、海外の Boo *et al.* (2015)の研究と比較すると自己決定理論の使用が多くみられ、次いで、L2MSS に関る研究が多くみられている。研究方法については、量的研究が 60.65%、質的研究が 11.57%、混合計画法 27.78%であった。データ収集方法で最も多かったのは横断研究であり 64.24%であった。次いで、2 回の調査を行っているものは、20.0%であった。量的研究では、*t* 検定／分散分析(ANOVA)が 29.8%であり、全体の約 3 割を占めるため、群間での比較あるいは、2 時点での比較 (pre-post デザイン)が多く使用されている分析手法であるといえよう。分析方法は、次いで、相関分析 (18.9%)、共分散構造分析 (15%)、探索的因子分析 (13.6%)が多くみられる。Aoyama (2017)の分析結果から、国内における L2

動機づけの特徴としては、出版論文数が増加傾向にあるということと、「Motivating」 よりも寧ろ「Motivation」に関する研究に焦点があるということ、大学英語学習者が調査対象者に多いということ、理論的背景にはL2MSS、自己決定理論、WTC、国際的志向性に焦点があること、また質問紙を中心とした横断研究が多いことが明らかになっている。

2.3 複雑系理論に関する新たな方法論の視点

近年、動機づけ研究分野において、複雑系理論を応用した研究が行われるようになった。複雑系理論を用いた動機づけ分野での研究はまだ数に限りがあり、八島 (2019)が言及するように「1 つの研究の中で複雑な現象をすべて捉えることは不可能です。研究者は、CDST[3]の特徴のいくつかに注目し、それが学習動機づけのどういった側面の変化を記述するのに適しているかを考え、試行錯誤を行っているというのが現状でしょう」(p.108)と研究に関する混迷している状況を示している。このように複雑系理論を用いた研究については、混沌とした状況ではあったものの、2020 年に Hiver & Al-Hoorie (2020) が「Research Methods for Complexity Theory in Applied Linguistics」を出版し、応用言語学における複雑系理論を用いた新たな量的研究・質的研究・混合計画方法での実証研究手法を用いた研究の枠組みを提案した。様々な研究方法がある中で、複雑系理論を基盤とした次に述べる研究方法を提示している。量的研究としては、 Time Series Analysis (時系列分析)、 Experience Sampling Method (経験サンプリング法)、Latent Growth Curve Modeling (潜在曲線モデリング)、Panel Design (パネルデザイン)、Multimodal Modeling (マルチモーダルモデル)、Single Case Design (シングルケースデザイン)、Idiodynamic Method (イディオダイナミック方法)がある。また、質的研究として、Qualitative Comparative Analysis (質的比較分析手法)、 Retrospective Qualitative Modeling (回想的再現モデリング)、Social Network Analysis (社会ネットワーク分析)、Concept Mapping (概念地図)、Design-based Research Modeling (デザイン研究方法)、Process Tracing (プロセストレーシング)、Agent-based Modeling (エージェントベースモデル)を提示し、混合計画方法の提示も行っている。以下に複雑系理論における量的研究方法（表 1 参照）と、質的研究方法（表 2 参照）を示す（詳細は、Hiver & Al-Hoorie, 2020 参照)。

表 1. 複雑系理論における量的研究方法 (Hiver & Al-Hoorie, 2020 参照)

複雑系理論における量的研究方法	
Time Series Analysis (時系列分析)	時系列分析では、縦断データを収集するが、同一の調査対象者からではない。時系列分析は、時間の経過に伴う大規模調査であり、観測期間が一定である。例えば、年間の図書館の利用率、図書館の年間の図書購入率、株式市場における株価の変動などが考えられる。
Experience Sampling Method (経験サンプリング法)	経験サンプリング法とは、縦断研究法の 1 つであり、時間の経過に伴ってある一定の期間、調査対象者はデータを誘発刺激によって行う。様々な環境は時間軸の中で、調査対象者は感情や思考、行動などについて回答を行う。

Latent Growth Curve Modeling **(潜在曲線モデリング)**	潜在曲線モデルでは時間の経過に伴う縦断データを取り扱い、成長や変化を分析する。潜在曲線モデルで扱う潜在性とは、データ分析上での観測的で一時的な曲線を潜在的なプロセスの発現であると捉える。従って、潜在曲線を推定するために、観測的反復測定を二次的なものとして捉えている。
Panel Design **(パネルデザイン)**	パネルデザインでは、縦断調査の中で、同じ調査対象者に対して同じ変数の測定を行う。例えば、同一の調査対象者に対して 5 時点の測定を行い、より明確な発達的変化を捉える。またパネルデザインでは、ダイナミックな変化を測定することに対して事前・事後のような研究デザインより柔軟である。
Multimodal Modeling **(マルチモーダルモデル)**	社会科学における研究者は、現実の社会が多層構造の影響があるとして捉えている。例えば高次レベル単位のクラスター（群）で示され、ランダム効果を伴うマルチモーダルの環境では、クラスターがネスティング (nesting) として呼ばれている。生徒で例える場合は、近隣の学校の教室内をネスティングとして考え、高次レベルユニットは低次レベルユニットを包含している複雑系理論ではネスティングシステム (nested system)を調査し、モデルや分割は、分散を各階層レベルに帰属させることを可能とする。
Single Case Design **(シングルケースデザイン)**	シングルケースデザインの特徴は、個人の焦点が置かれ、個人に対する介入の変化と効果検証を行う分析方法である。例えば、治療薬（肥満・糖尿・血圧・脱毛等）の投与では、個人の治療経過やダイナミックな変化を理解するために用いられ、臨床効果や特別支援教育に関わる介入研究で使用される。
Idiodynamic Method **(イディオダイナミック方法)**	イディオダイナミック方法とは、人がコミュニケーションを行う上での情意的・認知的側面を捉える新たな研究手法である。調査対象者からのコミュニケーションサンプルをビデオ撮影し、研究者が関心のある研究に関わる要因（例えば、コミュニケーションへの積極性・自信・不安）に対して、自己申告型評価 (self-reported rating)を行う、研究方法である。

表 2. 複雑系理論における質的研究方法 (Hiver & Al-Hoorie, 2020 参照)

複雑系理論における質的研究方法	
Qualitative Comparative Analysis **(質的比較分析手法)**	社会学の分野で取り入れられている方法論であり、比較や統合を行う社会における複雑性に着眼し、数少ない事例からでも原因結果・因果関係を説明することを可能とする。
Retrospective Qualitative Modeling **(回想的再現モデリング)**	複雑で、アトラクターによって制御されている変化の傾向について、ダイナミックであり発達の創発をするかを分析する。RQM は複雑系システムを個々の事例又は分析単位であり、個々の事例研究に分類されている。
Social Network Analysis **(社会ネットワーク分析)**	ノードと呼ばれる 1 つ以上の関係によって結び付けられる相互接続するシステムで、それらの関係性やプロセスは複雑化した実社会における基礎的なウェブ(網)を形成する。

Concept Mapping (概念地図)	概念マップあるいは概念地図とよばれるこの手法は、概念と概念を矢印で繋げていき、概念間の関係を表す階層構造となっていて視覚化していく図のことであり、概念間を視覚化する作成技法である。
Design-based Research Modeling (デザインベース研究)	この研究方法は、学際性のある領域によって学習の改新（イノベーション）をデザインそして実施し、学習を科学的に理解しようとする。介入を基盤とした方法論は、教育分野における研究と実践において使用されてきた。
Process Tracing (過程追跡法)	1970 年代に認知心理学で使用し始められた方法論であり、個人が意思決定を行う過程において、経験則を理解し、中間に介在する段階を調査することにあり、人の事象や時間軸に焦点があり複雑な因果説明を行うことを可能とする。
Agent-based Modeling (エージェントベースモデル)	近年社会科学系分野で幅広く応用されているコンピューターシュミレーションを取り入れた分析方法であり、個々のエージェントの行為と相互作用を通して、システム全体に与える影響を検証する。

このように、Hiver & Al-Hoorie (2020)では、複雑系理論を基盤として新たな研究手法を取り入れることにより、個々の全体と個々の個人に焦点をあてて分析を行っていける方向性を提示した。複雑に絡みあうマクロとミクロの視点を取り入れて、精緻に分析を行う複雑系理論を使用した動機づけ研究が、今後も期待される。

2.4 ウシオダの動機づけを関係性から見る視点に関する質的研究

本節では、近年注目を集めているウシオダの Person-in-Context Relational Model (環境に埋め込まれた自己: ウシオダの動機づけを関係性から見る視点)を概観し、ナラティブ研究を使用した Thompson & Vásques (2015)の研究を概観していく。

Ushioda (2009)では、これまで動機づけ研究の中で、最も頻繁に使用されてきた数量的解釈（量的研究）には限界があると考え、人の動機づけが人と環境における相互関係に伴ってダイナミックに変化することを捉えることができるよう、質的研究に着眼をした。Ushioda (2009)では、動機づけの量的研究（線形アプローチ）では、予測可能な要因というのは、原因結果論として限りがあるために、個人の動機づけの非線形的アプローチを用いた動的で、複雑で多様性のある視点に注目をした。量的研究（線形アプローチ）では、学習者と学習者と取り巻く複雑な環境、あるいは学習者個人のダイナミックな変化の起こる傾向に向き合うことができず、動的で相互依存関係的な本質を捉える必要があることを言及している。また、Ushioda (2009)の視点では、多様性があり環境要因との関係性を重視し、人の動機づけに関わる変化やプロセスは複雑であり、環境との相互依存関係を通した動機づけの複雑さを示している。Ushioda (2009) の Person-in-Context Relational Model (環境に埋め込まれた自己: ウシオダの動機づけを関係性から見る視点)に関わる研究については、現在に至るまでに実証研究が数少ない現状であるが、Pfenninger & Singleton (2016)の研究がある。また質的

研究方法で注目を集めているナラティブ研究については、当該研究分野においては、Thompson & Vásquez (2015)の研究がある。

Pfenninger & Singleton (2016)の研究では「Affect trumps age: A person-in-context relational view of age and motivation in SLA」と題して、英語を学習するスイス人（200 名）を対象に第二言語データ、動機づけの質問紙、言語学習のエッセイに関わるデータ収集を行い、13 歳時と 18 歳時点でデータ収取を実施し、そのうちの 100 名は 8 歳から言語学習を開始した学習者群で、100 名は 13 歳から言語学習を開始した学習者群であった。データ収集法には、量的研究と質的研究を行い、大規模データとしては量的研究での収集を行い、個人レベルのデータについては質的研究での収集を行っている。結果として、量的研究では、義務教育期間中における学習年齢開始時期については差がなかったものの、質的研究方法では、8 歳からの開始した学習者群と 13 歳からの開始した学習者群では、中学校段階での言語学習経験に差があり、開始年齢によっては多面的な複雑性があることを捉えた。

Thompson & Vásquez (2015)の研究では、ウシオダの Person-in-Context Relational Model (環境に埋め込まれた自己: ウシオダの動機づけを関係性から見る視点)のフレームは使用してはいないものの、近年注目をされている質的研究法であるナラティブ分析を使用して、3 名の言語教師を対象に質的研究を行っている。この研究では、L2MSS と心理学的リアクタンスに関する調査を行い、「自己 (I)」と「他者 (other)」に焦点をあてて分析を行い、「自己 (I)」は L2 理想自己との間に強い関係があり、その一方で「他者 (other)」は L2 義務自己に関連すると報告した。また L2MSS は、環境要因との関係性を発達させる必要性を論じ、第二言語習得分野においてナラティブ研究が、どのように個人差が言語学習時における環境要因と相互作用があるかを提示した。

3. 考察

本稿を総括すると、研究の動向としては、世界的にみると 2010 年度以降には「L2 動機づけ自己システム論」が最も多い動機づけ研究の理論的基盤であり、「統合的志向性／道具的志向性と L2 動機づけ自己システム論」、「L2 動機づけと複雑系理論」の研究が見られている。国内では「自己決定理論」「複数の理論の組み合わせ」「社会心理学的アプローチの研究」「その他」であり、世界的な動機づけの研究では複雑系理論を使用した研究が見られるのに対して、国内での動機づけ研究では、自己決定理論を基盤とした研究が行われていることが明らかになった。国内外では、研究のトレンドに違いがあることが明らかになっている。また国内においては、複雑系理論を基盤とした研究やウシオダの Person-in-Context Relational Model (環境に埋め込まれた自己: ウシオダの動機づけを関係性から見る視点)を基盤とした研究については、数に限りがあるために、質的方法を取り入れた今後の発展的展開が期待される。

研究方法の動向としては、世界的に見ると、335 編の論文中、量的研究法を使用した論文は 178 編であり、質的研究方法に関わる研究は 40%である。混合計画法を使用した論文は

41%であり、その他の研究方法を使用した研究方法は、7%であった。量的研究では、多変量分析・共分散構造分析（SEM）が多く使用され、質的研究では面接法を使用して、面接法（個人・フォーカスグループ）・観察法・談話分析がある。国内の研究方法のトレンドは、量的研究(61%)・質的研究(12%)・混合計画法(28%)であった。また横断研究を行う調査方法が 64%であり、縦断調査を行う調査方法が 20%であった。主に使用されている分析方法は、*t* 検定／分散分析(ANOVA)が全体の約 3 割を占めている。分析方法は、相関分析・共分散構造分析・探索的因子分析が多いと報告されている。世界的なトレンドと国内のトレンドでは、量的研究が主流であると考えらえるが、質的研究の論文数は、国内よりも海外の方が多いと考えられる。従って、国内においては動機づけ研究における質的研究が今後の展望として考えられる。質的研究については、複雑系理論で紹介した質的研究方法（質的比較分析手法・回想的再現モデル・社会ネットワーク分析・概念地図・デザインベース研究・過程追跡法・エージェントベースモデル）が挙げられ、この他にも、ナラティブ分析・グラウンデッドセオリーアプローチ・Q メソドロジー・会話分析・談話分析・複線径路等至性アプローチ等、様々な質的研究方法の発展的な可能性が考えられよう。研究方法については、様々なアプローチや方法論があるが「誰を対象に」「何を目的に」研究をするのか、「全体を見る研究をするのか」「個人を精緻に見る研究をするのか」、「時間軸」を取り入れるのか否か、研究の目的が何であるのか、研究を通してどのような未来を想像するのか。また、今後の研究分野への貢献や、社会貢献性を踏まえた上で、個々の研究にとって最も当てはまりの良い研究方法を選ぶことが重要であろう。

4. おわりに

本稿では、1959 年から開始した動機づけ研究の過去、現在、そして今後の発展的研究について、研究の動向と方法論的視座から総括を行った。研究史を通してみても、半世紀以上ある動機づけ研究の理論的基盤については、研究史の中でも研究時期によってその動向に変化がある。また研究方法についても、量的研究が主流ではあったが、近年の傾向として質的研究や混合計画法が注目を集めるようになっている。研究分野の傾向としても、動機づけ研究の研究論文は過去から現在にかけて上昇傾向であり、今後も様々視点から外国語学習時における学習者の動機づけを捉える研究や実践が行われていくことが予測されよう。また今後は、様々な研究方法を使用することによって、学習者の動機づけに関して、多面的に複眼的に精緻に分析を可能とし、量的研究・質的研究・混合計画法を通した動機づけ研究の蓄積が期待されよう。

注記：

1) 「L2 動機づけ自己システム論」とは、「L2 理想自己」「L2 義務自己」「第二言語学習経験」から構成される。「L2 理想自己」とは理想とする第二言語使用者としての自己、「L2 義務自己」とは、あるべき第二言語使用者としての自己として定義づけられる（馬場・

新多 2016 参照)。

2) 複雑系理論とは、動機づけの研究分野では、コンプレックス・ダイナミックス・システム理論 (Complex Dynamic System Theory)とも呼ばれ、八島 (2019, p.107)では、Larsen-Freeman & Cameron (2008)を引用して、異種のエージェントから成るシステム、変化を伴う、エージェント・システム同士は影響しあう、因果関係（原因結果論）では説明ができず、開放的であり、適応し、変化すると示している。

3) CDST(Complex Dynamic System Theory)とは、動機づけの研究分野ではコンプレックス・ダイナミック・システム理論としても呼ばれている(八島, 2019, p.107)。

参考文献

Aoyama, T. (2017). Language learning motivation research in Japan: a systematic reviewed. EuroSLA 27 Conference. University of Reading, UK.

Boo, Z., Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). L2 motivation research 2005-2014: understanding a publication surge and a changing landscape. *System 55,* 145-157.

Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (2011). *Teaching and researching motivation*. NY: Routledge.

Hiver, P., & Al-Hoorie, A.H. (2020). *Research methods for complexity theory in applied linguistics.* Multilingual Matters.

Larsen-Freeman, D., & Cameron, L. (2008). *Complex systems and applied linguistics.* New York: Oxford University Press.

Pfenninger, S.E., & Singleton, D. (2016). Affect trumps age: A person-in-context relational view of age and motivation in SLA. *Second Language Research, 32*, 311-345.

Thompson, A., & Vásques, C. (2015). Exploring motivational profiles through language learning narratives. *The Modern Language Journal, 99 (1)*, 158-168.

Ushioda, E. (2009). A person-in-context relational view of emergent motivation, self, ad identity. In Z. Dörneyi & E. Ushioda. (Eds.), *Motivation, language identity, and the self* (pp.215-228). Bristol: Multilingual Matters.

馬場今日子・新多了 (2016). はじめての第二言語習得論講義：英語学習への複眼的アプローチ. 東京：大修館書店.

八島智子 (2019). 外国語学習とコミュニケーションの心理：研究と教育の視点. 関西大学出版.